

琉球石灰岩の地形と利用

目崎茂和

サンゴ礁をもつ琉球列島の島々は、地形的には山地をもつ「高島」と台地主体の「低島」とに大別される。「高島」が古・中生代の古期岩類か火山島であるのに対し、「低島」のほとんどが、琉球石灰岩（更新世石灰岩）からなる低平な島である。沖縄県の面積の約3分の1が、琉球石灰岩におおわれた「低島」域である。

琉球石灰岩の地表や地下には、溶食作用によるカルスト地形が存在する。奄美諸島の一部には、ドリーネのような浅い溶食凹地をもつカルスト台地もあるが、沖縄島のように多くの島々では、溶食されずに残った凸地形が主体である。この地形は、断層崖や段丘崖に沿う堤状の特異な地形をなして、戦後の米軍地質調査によって、ライムストーンウォール（Limestone wall）と名付けられた。沖縄島中南部や宮古島によく発達する。南北大東島の「隆起環礁」は、この種のカルスト地形であり、世界で十数例しかない特異なサンゴ礁起源の低島である。

琉球石灰岩の地域では、地表河川が乏しく井戸を掘るのも困難なため、泉や湧水、地下河川（降り井戸、

暗川と呼ぶ）を利用出来るかどうか、村落の立地と深くかかわってきた。石灰岩層が滞水層の役割を果たし、石灰岩堤や段丘崖下では、湧水が得やすい。とくにその南や南西側に方形区画の宅地地割をもつ集落が多いのは、冬の北東季節風を防ぎ、日当たりのよい南に面した区域を利用する、計画的な「風水村落」の特徴である。石灰岩堤の高まりは、展望がよいから、石垣の包囲をもつグスク（山城、要塞）や御嶽（拝所）に利用された所が多い。一方の段丘状の平坦地には、石灰岩の残留土壌（鳥尻マーヅと呼ぶ）が薄く存在し、イモやサトウキビなどの畑地となってきた。

地下には無数の洞穴（鍾乳洞）が形成されているが、琉球石灰岩層が薄いため短い水平洞がほとんどである。観光洞としては、玉泉洞（沖縄島南部）が名高い。洞穴は元来、墓所や拝所として利用されてきたが、第二次世界大戦時には軍事用の壕や避難壕となったため、今では戦争史跡ともなった。

このように、琉球石灰岩は多様に利用され、人々の生活の中に深く根付いているのである。

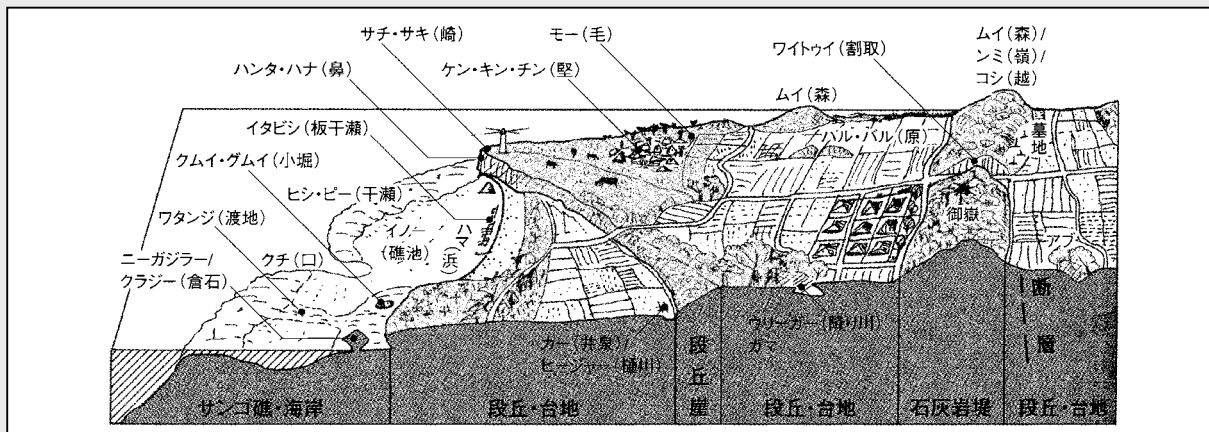


図1 琉球石灰岩からなる「低島」の地形と地名、土地利用を示したモデル図（目崎・渡久地 2002）